

# 「君が持っていてよ」

—それぞれのつながり—



## 【支援活動の周辺で】

今回の支援活動で主な運搬品は顕微鏡でした。前号にも書きましたが、流された理科室の回復は、物品の希少性と費用という観点からみて、かなり難しい支援で、なかでも難題は顕微鏡の調達でした。各方面に働きかける中で、昨年度まで教鞭をとられていた東京理科大学の井上康則先生から、浜野顕微鏡さんをご紹介いただき、光源内蔵顕微鏡9台（広田中）、反射顕微鏡9台（小友中）の支援にこぎつけました。既に電気が来ている広田中では光源内蔵の顕微鏡、校舎への通電が十分でない小友中では反射顕微鏡が使いやすいということでした。

理科教材・教具の調達を通して、門外漢である私たちが「専門家」にお会いし、お話をお聞きすることも多くなりました。原発事故を通して「専門家」への疑いのまなざしが高くなっていますが、自らの仕事に対する厳しさを通して、「専門家」として生きてきた／生きていらっしゃる方々を肌で感じることもしばしばです。



今回顕微鏡18台を提供してくださったのは、浜野顕微鏡の浜野一郎さんという方で、年齢67歳、今は、顕微鏡の販売というより顕微鏡のコレクションに力が入っているとのことでした。今回の支援の提供にも「行き先は決まっていますか」という確認があり、そのお話の様子から、提供した顕微鏡が無造作に扱われることをとても心配している様子うかがえました。

浜野さんのお話によれば、肉眼で生物を観察する顕微鏡は、顕微鏡のデジタル化のあおりを受けて、もうすぐ姿を消すそうです。そもそも理科備品販売という商売は3代が限界とされているとのことで、「昔は“てんびん”が重要な備品でしたが、今はデジタル化されていて、てんびんを使う人はいませんよね」という例を出され、浜野顕微鏡も3年後に店じまいが決まっているとのことでした。「顕微鏡屋としては、肉眼で確認するのではなく、デジタル化された映像をそこにある事実として見ることに心配はあります」とも付け加えられておられた様子に、時代の流れの中で、なくならざるを得ない器具であることを理解しつつも、その流れに危惧を感じ、自らの仕事を全うしていくその姿に「専門家」をみないわけにはいきませんでした。

このように支援活動は、少しずつ裾野を広げながら進んでいます。その裾野の広がりから、次のようなこともありました。私たちの支援隊は、移動距離が長いこと、個々に仕事をしながら活動をしている者が中心であることから、かなりの強行軍です。ですから、参加したいけれど、どうしても躊躇してしまうということもあるようです。その中には60代、70代という高齢者もいます。「自分の目で確かめるために参加したい」「でも、自分の体力からして、他の人の迷惑にならないか」「自分のような高齢者が行って何になるのか」、そのような葛藤を繰り返し、ようやく参加にこぎ着けた方もいます。60代の参加者は、モビリア避難所の高齢者とお話をし、津波とその方の人生との関わりを

聞き、最後には「西村京太郎のサスペンスが読みたい」というニーズを聞き取りました。また、70代の参加者は、万石浦中学校の避難所で、認知症を患う夫の介護をしつつ避難生活をする方とお話をし「着の身着のまま出てきたから、夏服の準備がない」というニーズを聞き取りました。いずれも希望の品物の提供をすることができました。

送られてきた夏服を手にして、万石浦中学校で該当するおばあちゃんを捜し当ててお渡ししたとき、「何の関係もないのに、こんなに心配してもらって、本当にありがたい」と目を潤ませていらっしやいました。個と個のつながりが支援の基本であることが、支援活動のたびにますます強く感じさせられます。

支援隊のメンバーは、常に10代から50代と年齢幅がありますが、時に、それが60代、70代になることもあります。年齢を重ねても劣らぬ好奇心や「自分の目で確かめる」ことへの拘りが、人と人を結びつけることをこれからも学んでいきたいものです。

Ed.ベンチャーでの東日本大震災支援事業は、万石浦中学校での子ども学習支援の新たにスタートさせるために、さらに多くの賛同者を募る必要があり、5月24日（火）夜7時から、第2回の報告会を開催しました。土曜日だけでなく、日曜日の子ども学習支援を模索する動きもあり、新たに大学生も支援隊に加わることになりました。早朝の東川口駅でのピックアップも始まり、支援活動の輪は、少しずつではありますが着実に広がりつつあります。支援隊のメンバーが広がる中で、支援する者の間でも、学び／学ばれる関係が広がっていくことを望みたいと思います。

## 【モビリア避難所の子ども学習支援】



すたんどばいみーによるモビリア避難所での学習支援も新しい展開を迎えてました。仮設入居が転機と予想していましたが、それ以前のところでの新しい展開でした。きっかけは、モビリア避難所の近くに住んでいて、家そのものは被災していませんが、生活に困難を感じている中学生がきっかけでした。土日の部活動にも参加していないその2人の姉弟との学習が始まったのです。2人は、勉強を苦手としているようで、なかなか学習を始めるムードになりませんでした。すたんどばいみーメンバーの粘り強い誘いによって、土曜日の午後には学習がスタートしました。そして、翌朝は、朝7時の家までのお迎えから始まり、それから2時間、がっちり勉強をしていました。

そんな雰囲気の影響されてか、これまで学習から距離のあった小学生の中には、勉強を始める子どももおりました。もちろん、そのような中であっても、「絶対に勉強はし

ない」という態度を貫き、その場所からいなくなる子どももいますし、他方、難しい折り紙に興じている子どもたちもいました。ここでの学習支援が、今後のどのように発展していくのか、興味深いところです。

### 【<sup>まんごくら</sup>万石浦中学校避難所の子ども学習支援】

一週間たっても約束を憶えてくれたようで、前回とほぼ同じメンバーの小学生が参加してくれました。お勉強はやはり敬遠されて、すぐに「工作がやりたい」と強い希望。紙でワニをつくったり、磁石でクリップを動かす迷路を造ったり、弓矢やパチンコといった武器をつくったりと、それぞれが思いっきり楽しんでいました。お互い顔もしれて、ペースをつかんでの楽しい雰囲気でした。

時間になって避難所に帰るとき、つくったパチンコを持っていくのが気になったのか、支援者の一人に「預かって」と頼んでいる小2の男の子。「教室にはおいておけないし、ぜひ持って帰ってまた明日遊ぼうよ」と支援者が答えます。男の子はもっと強くお願いしたいのだけど、名前が分からない。そこで思わず、「君が持っててよ!」。「君」と呼ばれて、その支援者はくすぐったいような気持ちだったのではないのでしょうか。そんなほほ笑ましいやりとりもあったようです。

一人支援者が残ったの日曜日、月曜日にも、5人の小学生が来てくれました。

その一方で中学生の姿が避難所にはなく、残念ながら中学生の参加はありませんでした。中学生の時間も小学生に占領されていました。中学生の生活ペースにあわせて、どの時間帯に設定するのが、今後の大きな課題です。

日常生活に戻ろうとする力が大きく働いている学校で、避難所から通う子どもたちはどんな立ち位置にいるのでしょうか。状況を主張できない弱い立場にいるのではないだろうか。そんな心配が胸をよぎります。避難所に生活する小学生の中には、自分の学校にも通えず、また、避難所の隣の万石浦小学校でもなく、ちょっと遠くの学校に通わなければいけない子どももいます。

近くの渡波中学校は、避難所になっているため授業ができず、万石浦中学校の教室を借りて授業をしていることもわかってきました。

「子ども支援」というとき、その言葉の中には、「家庭での子ども」や「学校での子ども」を支えるという意味も含まれるのは当然ですが、それはとりもなおさず、子どもたちが直面している現実と一緒に向き合うことでもあります。地震・津波・冠水・避難所生活・学校生活…。子どもたちが向き合わなければならない多くの現実を考えると、胸が締め付けられる思いがします。「そばにいる大人」として、しっかりとできることをしていきたいものです。



### 【今後の支援の予定】 5月31日現在

- 6月3日(金)～6月5日(日)の第10回支援(3部隊構成)  
金：小友・広田中の支援物資運搬(理科教材・教具-第2回目-)

土：モビリア避難所の子ども学習支援(すたんどばいみー)  
万石浦中学校避難所子ども学習支援  
日：モビリア避難所子ども支援、万石浦中学避難所学習支援

### 【ご協力いただきたいこと】

1. ご提供いただきたい物資 ※提供できそうな物品があればご連絡ください。
2. 同行していただける方 ※参加可能な週末をお知らせください。

### 【ご協力に感謝!!】

- 今回の支援隊のメンバー(13人) 柿本隆夫(引地台中学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水睦美(東京理科大学)、苅谷夏子、池田喬(南林間中学校)、菊池敬幸(引地台中学校)、関野旬哉(引地台中学校)、妹尾渉(国立教育研究所)、保坂克洋(立教大院生)、池田健二(立教大院生)、富田希(東京理科大学)、すたんどばいみー：チューブサラーン・長畑シゲミ・伊藤瑞姫
- 小友小中学校 ①支援物資の提供：顕微鏡9台、オシロスコープ1台、②寄付からの買い出しによる支援：保健室カーテン
- 広田小中学校 ①支援物資の提供：顕微鏡9台、オシロスコープ1台、②寄付からの買い出しによる支援：学校事務用品
- モビリア避難所 ①すたんどばいみーの子ども学習支援(5人、2日間のべ7時間) ②支援物資の提供：ジャージ(上下15セット、ジャージ下13、ハーフパンツ24)
- 山十伊東文具店(教材業者) Tシャツ販売(1人、5時間)
- 三上教材社(教材業者) 小友中・広田中のポスターカラー購入
- 万石浦中学校避難所 子ども学習支援(6人、3日間のべ11時間) 万石浦小中学校での子ども様子の観察
- ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む) 5/22～5/27 浜野一郎(浜野顕微鏡)、井上康則(元東京理科大学)、洲崎仁美(大和中学校)、河村匡祐(大和中学校)、内藤順子(大野原小学校)、宗内綾子(東京理科大学)、工藤美知子(大和中学校)、清水いく江、手塚文雄、大野かよ(大野原小学校)、市村陽子(大和市教育支援教室)、松永雅史(大和市教育支援教室)、戸川美郎(東京理科大学)、五十嵐康子・千秋

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

